

【研究論文①】

多分野協働カンファレンスにおける ケース支援への気づき 促進をめぐる考察

古賀美由紀^{*1}
麻田 萌^{*2}

本論では、多分野協働の現場におけるケースカンファレンスで、参加者が気づきを得るプロセスを明らかにすることで、効果的な多分野協働カンファレンスを実施するための示唆を得ることを目的とした。A 母子生活支援施設のカンファレンス参加者へのアンケート及びインタビュー結果を M-GTA（修正グラウンデッド・セオリー・アプローチ）にて分析した結果、資料作成の段階でも気づきを促進し得ること、カンファレンスの目的を共有することがディスカッションを促すこと、スーパーヴァイザーとクローズドなメンバーは異なる気づきをもたらし得ること、他者からの意見は反芻し落とし込む過程を経る必要があることが明らかになった。カンファレンス内のコミュニケーションの工夫は当然必要だが、それに加えて準備と振り返りを丁寧に行い、資料や構成員等を工夫することでより気づきを促進し得ることが示唆された。

キーワード：多分野協働、ケースカンファレンス、母子生活支援施設

I. 問題と目的

母子生活支援施設とは、原則 18 歳未満の子どもを養育している母親と子どもが一緒に入所できる、唯一の母子共生の児童福祉施設である。職員は母子支援員（母子指導員）、児童支援員（少年指導員）を必須とし、規模や入所世帯の支援ニーズに応じて保育士、心理療法担当職員等も加わり、多分野の専門家が協働で支援にあ

たっている。施設数自体は年々減少しているものの、国が推進する妊娠期からの切れ目のない子育て支援において、地域で様々な生きづらさを抱える子育て家庭への支援ノウハウを普及していく役割が期待されている。

母子生活支援施設では、入所した母子が退所するまで、母子支援員を中心に、より豊かな生活に向けたケースワークを主とした様々な支援が行われる。自立に向けて、生活保護受給設定や家計管理の経済面に関する支援、離婚や就労の手続きに関する支援等、世帯全体の動きへの

*1 白百合パークハイム

*2 東洋学園大学

支援が入所直後から進められる。それらと並行して、母子関係への支援や、保育、学童保育、行事の企画・運営等、子どもの育ちを保障するための支援が行われる。加えて、複雑多様な背景を抱えて入所する母子が多くを占めるため、ケアの視点が重要である。それらの支援に、社会福祉士、保育士、心理専門職がそれぞれの専門性を生かして様々な局面で関わっていく。特に支援困難ケースに対しては、複数の職員が役割分担をしながら、チームで支援にあたる体制が必須である。一方で、それらの多職種がシフト制で勤務しているため、統一された方針に沿って連携できるチーム支援体制を組むには工夫も必要である。

このような多分野協働の現場においては、連携や支援方針の統一のためにケースカンファレンスが活用されることがある。ケースカンファレンスとは、医療、地域保健、教育、保育といった様々な対人援助の現場で活用されている、支援対象の理解を深め、支援方針や内容を検討する方法や場の総称である。医療分野でケースカンファレンスを実施した例では、参加者が患者に関する何らかの気づきを得て、より良い治療につながられた（黒田ら、2021）、カンファレンスの継続が職員の意識の変容を促し、治療の意味や患者のQOLを考える風土を創造した（服部・片山、2021）報告がある。また、医師や看護師といった職種の違いを問わず、自己成長を実感しチームアプローチの重要性を意識するようになった報告も挙げられている（横田・上村・小田、2011）。心理学の分野では、参加者がケースへの関わりをめぐる情緒体験に気づき、それをカンファレンス参加者全員で抱えることで支援にまつわる自分、他者、組織への気づきを促し、支援へのモチベーションを高める等の効果を持つ方法も提唱されている（鈴木、2015）。ケースカンファレンスを効果的に実施できれば、

支援対象や支援のプロセスに関して何かしらの気づきを得られる。さらに、多職種で支援方針を統一する「作業」に留まらず、チームとしての連帯感を生み質の高い支援を展開する効果も期待できると考えられる。

ただし、多分野の専門家が集ってケースカンファレンスが効果的に機能するよう実施することは、容易ではない（藤井、2018）。多職種協働は対人援助の各分野で今や当然とも言える支援体制である。しかしながら、高圧的なコミュニケーションや情報伝達のための対話のないやり取り、職種間交流の不足が協働の阻害要因に挙がる（松下・市川・藤谷・石川、2020）、一方の職種の助言を仰ぐだけの受動的なやり取りになる（浜谷、2005）等、各分野で効果的な協働には課題がある。多職種が協働する風土を促進するには、自由な意見の交わし合いや職種間のやり取り、相互傾聴や思いの共有が必要である（松下ら、2020）。また鈴木（2015）は、カンファレンスの場で展開される情緒体験を観察し、その意味を見出しながら体験の受け皿になる機能を参加者全員が担う重要性を主張している。これらから言えるのは、ケースカンファレンスはその効果を最大限に発揮するためには、支援対象や支援の情報が豊かに行き交うのはもちろん、その情報が持つ意味や情緒的体験についても参加者が関心を持ち、理解し合う場となる配慮やコミュニケーションが必要であろう。

母子生活支援施設においては、入所時アセスメントから自立支援計画策定とその実行、問題行動が表出した時の緊急対応時には、関わるすべての職員で情報を共有し支援方針を確認していく必要がある。同時に、日々の支援や緊急対応時には、職員の精神的負荷をケアし合わなければ、チーム全体での持続可能な支援は展開し得ないと言っても過言ではない。母子生活支援施設のように、利用者のトラウマにさらされる

ことが支援の中で多くなる職場では、単なる支援方針の統一が図られるだけでなく、支援にまつわる様々な情緒にも関心を寄せ、職員間でケアし合う風土を培うことが支援の充実につながる。それを達成し得るケースカンファレンスの実現が望まれる。しかしながら、児童福祉分野で多職種が協働して行うケースカンファレンスは、実施例やどのようにそれを実現し得るのかに関する知見が、極めて限られている。

そこで本研究では、著者らが所属する A 母子生活支援施設で実施されている多分野協働カンファレンスを取り上げ、効果的な場となるためにどのような工夫が必要かを検討する。カンファレンスによる様々な効果を最大化するには、参加者が対象ケースや支援にまつわる何かしらの気づきを得る体験が鍵となることは、先行研究から確認されてきた。そのため、本研究では A 母子生活支援施設で実施されている多分野協働カンファレンスにおいて、参加者の気づきがどのように促されていくのかを明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. A 母子生活支援施設のケースカンファレンスの概要

A 母子生活支援施設（以下、A 施設とする）では、月 1 回全職員が参加するケース会議を実施している。インシデント・プロセス法の形式で、世帯の現在の情報を共有し、今後の対策を検討することが主目的に行っていた。施設長が主催し、心理療法担当職員（以下、心理職）がファシリテーター（FT）を担当している。その他のカンファレンス構成員は、母子支援員、児童支援員、保育士である。X-3 年より、検討対象となる世帯のニーズにより合致した支援を検討する場となることを目指し、同法人研究所所長に、ファシリテーターである心理職がスーパーヴァ

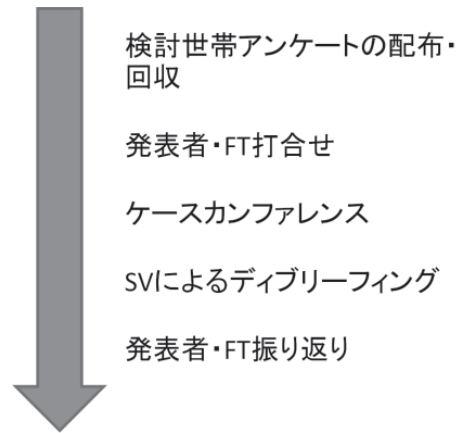


図 1 A 施設ケースカンファレンス

イズを受け改善に着手した。ケースカンファレンスにもスーパーヴァイザー（SV）として同所長を招聘した。効果的にケース検討を行うための構造化が重要であると考え、母子生活支援施設における効果的なケースカンファレンス実施のためのカンファレンスシートを開発した（古賀・青木，2021）。これを基に、X-3 年より次のプロセスでケースカンファレンス実施している（図 1）。

ファシリテーターは月初めに、検討ケースを決定するためのアンケートを職員全員に配布する。一人 2 票与えられており、最も票が多かった世帯をその月の検討ケースとする。選ばれたケースの世帯担当職員及び副担当職員は、カンファレンス 1 週間前までに資料を準備し、ファシリテーターと事前に打合せを行ってケース会議当日を迎える。カンファレンス実施後は、2 週間以内に発表者と副担当、ファシリテーターが、ケース会議の振り返りを行う。

2. 研究協力者

協力者は、A 施設のケース会議にて、自分の担当ケースを発表したことがある職員 7 名（男性 1 名、女性 6 名）であった。経験年数は 4 年から 13 年であり、全員発表者、参加者どちら

の立場でもカンファレンス（CF）参加経験があった。

3. 調査手続き及び実施方法

調査期間：X年2月～3月

A施設の施設長に本研究の目的、調査内容、及び倫理的配慮について説明し了承を得た後、職員会議にて同内容を説明した。ケース会議に参加したことがある職員7名にアンケートを配布し、回答をもって同意を得られたこととみなした。アンケートの項目は、次の三つである。①次の各段階で、ケースについての気づきはありましたか。（あった場合のみお答えください）、a）記入用紙へ書き込む準備段階、b）ケース会議中の参加者の発言を受けて、②ケース会議後、具体的に着手したことはありましたか。③ケース会議を進める各段階で課題に感じたことはありましたか。

アンケートの記述内容をより明確化するために、半構造化インタビュー（最短9分、最長26分、総インタビュー時間121分17秒）を実施した。インタビュー内容は、協力者の同意を得てICレコーダーで録音し、インタビュー終了後に逐語に起こして文字データ化した。アンケートの記述回答にインタビューの逐語起こしデータを補った記録を分析対象とした。

4. 倫理的配慮

アンケート及びインタビュー実施にあたり、研究の趣旨、協力は任意であること、匿名性は守られること、途中で協力を辞めても不利益を被らないこと、データの保管や破棄について文書、及び口頭で説明し、同意を得られた者のみ実施した。

また、本研究は白百合心理・社会福祉研究所の倫理審査委員会の承認を得て行われた（承認番号22004）。

5. 分析手続き

インタビューから得られた文字データは、多分野協働のケース会議において参加者のケースに関する気づきはいかに促しうるか理論生成を行い検討するため、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）（木下，2020）を用いて分析した。分析焦点者は「A施設のケースカンファレンス参加者」であり、分析テーマは「ケースカンファレンスにおいて担当ケースについて気づきを得るプロセス」とした。分析手順は次のとおりである。

録音したインタビューデータを逐語に起こし、文字化したデータのうち、分析焦点者の「気づき」について述べている発言、その気づきにいかにして至ったのかの語り、カンファレンスに参加している時の心情を語る発言を抽出し、分析ワークシート（木下，2020）を用いて概念生成を行った。インタビュー実施者の筆頭著者に第二著者が意図を確認し合意を得ながら概念間比較を行い、カテゴリー生成していった。生成したカテゴリーをもとにスーパーヴァイズを受け、カテゴリーの再構成を行った上で概念図を作成した。

Ⅲ. 結果と考察

分析の結果、22個の概念から、4個のカテゴリー、2個のサブカテゴリーが導き出された（表1）。これらの関係図を図2に示す。生成された概念やカテゴリーから見出された、多分野協働カンファレンスにより参加者が気づきを促されるプロセスについて説明する。なお、概念は【 】、サブカテゴリーは〈 〉、カテゴリーは〔 〕で示し、概念やカテゴリー名は、説明の文脈に即して随時助詞等を、本来の定義からの逸脱がない範囲で変更している。

表1 生成したカテゴリー概念と定義、その具体例

Category (Subcat.)	概念	定義	具体例
支援の変遷を振り返る内的整理	日々の支援の回顧	分析焦点者が、これまで自分が行ってきた支援を思い出す、当時の様子を振り返る。	もう当時は本当に手続きとか、やることが毎日ある。今日は区役所、今日はどこで、今日はどこという感じだった。かつお母さんのバタバタ感に巻き込まれてるなって感じもあったので…。
	支援への思いや意図の想起	ケースに対する各支援を実施しようと思った意図を再度思い起こすことに言及する。	支援記録とかを振り返っていく中で、ああそうだ。こうだった。こうだからこうしようと思ったんだったと。
	世帯の年表作り	ケースに起こった様々な出来事を、文章から時系列に起こす、あるいは起こったことをそのまま時系列に並べる作業に触れる。	文で読んでいるよりも、その表というか時系列にしていこうによって、もっと具体的にイメージができる。
	困りごとの仕分け	困っていることを、困り感を抱く主体別に分ける作業に言及する。	困っていることと心配なことを、母子と職員とで分けて整理できる。混同しがちになることが多いため、それも良い。
安心感のあるCFの場の構築	(発言の精査) 検討目的に見合うか逡巡	CF中の自分の質問や、他者からの質問への自分の返答が的外れでないか、本来知っているべきことだったのではないかと等とCFの円滑な進行に差し支えないかを揉む。	質問の意味も「ずれたらどうしよう。今、こういうこと聞いているんじゃないよね」とかで、今聞いていること、なんだろうって焦っちゃう。
	噛み合った議論への配慮	発表者が求めている意見が、CFの限られた時間内に、寄り道することなくやり取りされるように、自分が発言しようと思っていた内容を取捨選択する。	自分が発言することによって、何かそこにひっかかりを持たれてしまったとしたら、本当は担当の方としてはもっと違うことを話したいのとか。自分の一発言に関して、限られた時間の中で、そこにとられちゃうんだったらちょっと今はやめておこうかなというような頭が働く。
	CFの目的を意識	CFの場でどのような議論が展開されるべきか、発表者が検討したい点は何かを意識する。	(振り返りの場に関して) 自分の本当に気持ちの面、自分がただただ思っていることとか、支援どうこうの話じゃなくなってきたら、会議の場、みなさんがいるところはちょっとそぐわないのかなと思うんですけど。
	他者の視点との出会い	自分以外の参加者、発表者以外の職員から何かしら意見や発言を受ける。	違う視点から見ている人の意見を聞くと、確かにそうだなって思えるような、「そっかぁ」みたいなところはあります。
	他者の提案を反芻	他の職員から出てきていた支援のアイデアについて、頭の中でその内容を繰り返し思い出し、内容や意図を再確認する。	この支援をやっていけばいいんだなっていうことが、わかっているんですけど、「あ、こっつてどういう意味だったっけ」というのが再度振り返りをするによって、再度もう一回こう、落ちる、みたいな感じですよ。
	ケースと支援との相互作用の理解	ケースと支援の現状との影響関係の解釈を理解する。	お母さんの言語量が多いので、それを聞くだけになると、お母さんもまとまらないからみたいな話があったと思うんですけど。当時は本当に手続きとか、やることが毎日ある。お母さんのバタバタ感に巻き込まれてるなって感じもあったので、確かにそれじゃあお互いが落ち着かないで一緒にバタバタしちゃうなって思いました。
(精神面のバックアップ)	同じ見解の発見による安心感	言葉は違えど、同じ考えを持っている人が他にもいることを知る、わかることにより安堵する。	発表した時に、おんなじように考えてる。でも違う言葉で言っていただけだったりすると、「そうそう」って自信につながったりとか、「こういう支援がいいかな、どうかな」って思っていたのを他の方から出していたら、「良かった、私もそう考えてたな」という安心感につながる感じです。
	理解されている感覚	自分の日々の支援の意図や担当ケースのことを理解してもらえると信じられる感覚。	どういう感じで私が関わってるかとか、その世帯がどういう世帯であるかっていうことを、多分みんながわかってくれた上で出してくれる意見だから、腑に落ちるっていうふうには思うんですけど。
	支援・見立ての自信補強	自分のケースの見立てや支援を参加者に認めてもらえたことで、自分の考えていた見立てや支援に対して自信が補強される。	これでいいんだとか、自分の実践に対しての承認を得られるみたいなのは、本当に、それが見える化されるっていうのは安心できるんじゃないかなと思います。

ケースを支援する営みにまつわる気づきがあった感覚	自分の価値観の認識	自分の考え方や思い込みに思いを馳せる、それらを言語化する。	わりとこういうものっていうふうに思いがちで、多分そこにはめたがる傾向があるのかなって、自分はちょっと感じる部分があって。やっぱりそういうのってこう支援者側のエゴなのかとか、色々思う部分はあるんですけども、やっぱりこういう考え方が正しいんじゃないかとね。
	感情の主体の明確化	記録を読み解き資料で母子それぞれの様子や支援を記述していく中で、登場する一つひとつの思いや感情の主語を確かめられる。	職員側が困っていただけであって本人は思っていないかもとか、この困り事は誰かなっていうのは、わりと明確になりました。
	生育歴の文脈に沿った利用者理解	担当ケースに起こったこれまでの生育歴上の出来事を、自分の感覚に引き合わせて考え、理解する。	何かこういうふうにして、この翌年にこれがあったってことかとか、これ何歳の時なんだみたいなのが一致して、なるほどと、腑に落ちるというか。
	変化の発見	それまで認識していなかったが、母子に変化があると感じられた。	特に長い世帯だと、最初の頃にあった支援だとか、どういう関わりしてたのかっていうのが、断片的にでしかなくなって、改めてその記録見て、振り返ることでその時点から今のところまで、このぐらい変わったんだなとかっていう変化が、すごい見えるなあってところはありましたね。
	対象外職員と母子との関わり	個々の職員と対象の母子との関係性の違いによって、母子が職員との接し方を変えている、見せる側面に違いがあると認識する。	担当と担当じゃない職員との関わり。主にお母さん。私の時はこうだけど、担当じゃない時はそんなざっくばらんに話すんだとか。
	利用者の行動の背景理解	理解できなかった利用者の行動の意味や、その背景にある事情に関する手がかりを得る、あるいは背景にある事情を理解する。	こういうところって子どものこういうのにつながってるかも、とか。例えばお母さんの慌ただしさとかバタバタした感じとかが、当時の長男の落ち着いたのさにつながってたんじゃないかなとかっていうのを文字にしてみても、わかったかなっていう。
支援の推進力	支援計画の補強	元々の支援計画自体の変化の有無を問わず、CFを経て新たな視点や方針等が+αされ、支援を進める準備が整ったり、より豊かな支援計画になる。	・新しく何かをやるっていうよりも、今の支援の継続が結局のところ大事なんだねっていうような再確認。 ・そういうのはどうかって言われた時に、必要なのは働くだけって思ってたから、そこに対して何もなかったですけど。そういう方法もあるんだなって、確かに気づけました。
	支援のタイミングの助言	様々な事情を考慮して支援を決める中で、このタイミングで支援を行った方が良く、と決断できるだけの必須のタイミングを自覚、認識する。	でもやっぱり会議の場とかで、こうこうですよ、ね、と言われてああそうですよね、やっぱりねっていうふうになるっていう。やっぱりスルーしちゃダメですよっていう。
	支援方針の共通認識	自分が感じていたケースに対する見立てや支援の方向性が、他者の意見と一致して、全体として統一された見解が出来上がることに触れる。	みなさんのその支援に対し、支援に対しての方向性が気持ちの面を、みんなこう同じ方向を向くと思うので、それでよりやりやすいというか。これってこういう意味あるよねみたいなところが、共通認識が持てるのでよしいかなって思います。

1. CFがもたらす効果に至るプロセス

分析焦点者である「A施設のケースカンファレンスに参加した職員」が「ケースを支援する営みにまつわる気づきがあった感覚」に至るには、発表者の立場で行う資料作成によって起こる「支援の変遷を振り返る内的整理」と、CF当日の参加者の〈発言の精査〉から起こる「安心感のあるCFの場の構築」がそれぞれ行われる。それらを基に、発表者、参加者どちらの立場でも【CFの目的を意識】することとなる。各回のCFで何を検討すべきか、何を議論すべ

きかといった目的を意識して初めて、CFのその場で発言が促され【他者の視点に出合う】体験につながっている。仲間内の意見との出合いは、発表者にとって〈精神面のバックアップ〉を受ける体験も生む。〈精神面のバックアップ〉が得られると、発表者は改めて様々な気づきを得られる自由な内的作業が促されるだけでなく、CF後取り組む支援が定まり実行に移す「支援の推進力」につながってもいる。効果的なCFのために心理的安全性の担保が重要であることは周知の通りである。臨床心理分野における

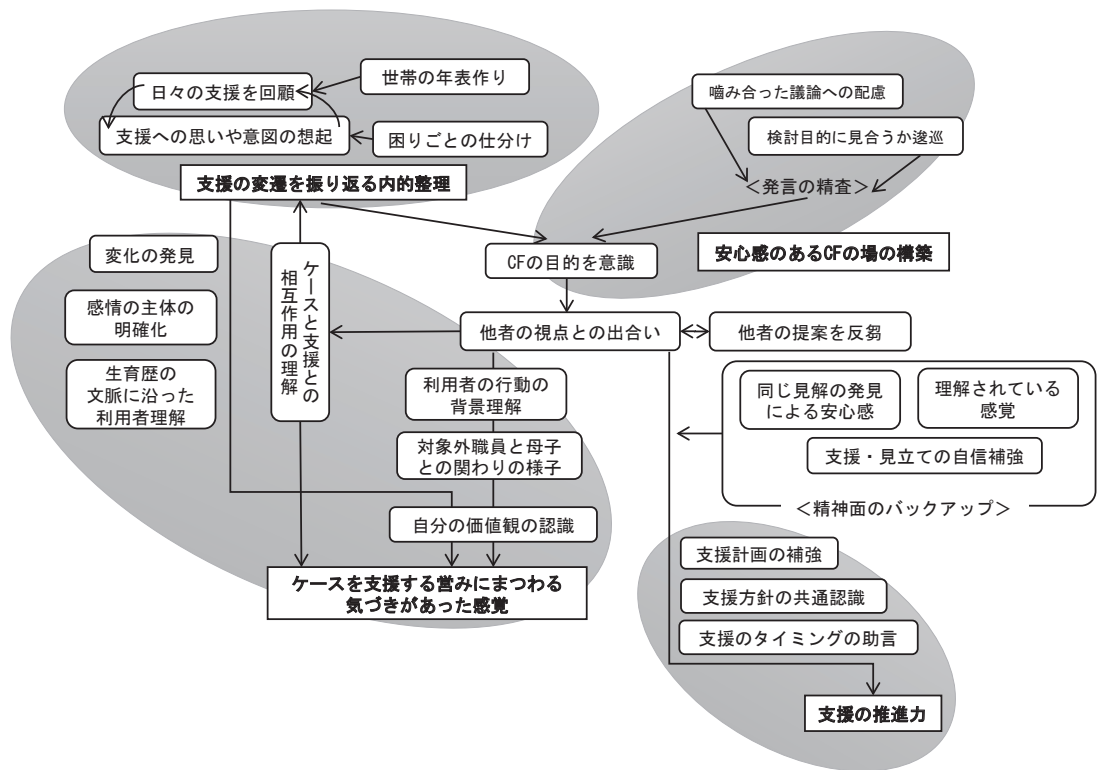


図2 各カテゴリーの関係図

ケースカンファレンスでは、それは枠の設定と遵守、ファシリテーターの運営、スーパーバイザーによる守られた場の監督等で実現する。多職種でのCFの場合、それらの構造よりも、CFの目的を共有することが、参加者全体の発言を促し、発表者がそれによってエンパワーされる〈精神面のバックアップ〉を得るためにも必要であることが示唆された。

分析焦点者がどのような立場でCFに臨むかによって、気づきに至る二つの異なるプロセスが成り立つ。一つは、発表者の立場である。発表者はCFの検討ケースの情報を資料フォーマットに則って整理していく。特に、自治体からの情報や記録システムにある入所後の出来事を時系列に並べる【世帯の年表作り】と、母子と支援者それぞれの【困りごとの仕分け】を通して、【日々の支援を回顧】し【支援への思いや

意図を想起】する。すなわち、資料作りは実質的なCF準備であるだけでなく、思考や感情を含めた「支援の変遷を振り返る内的整理」になっている。CFを迎えるまでのこの作業プロセスで、日頃見落としていたケースの【変化を発見】する、現在に至るまでに支援者や母子が抱いていた【感情の主体が明確化】する、【生育歴の文脈に沿った利用者理解】といった、母子や担当者自身にまつわる気づきが生まれる。発表者個人の資料作成の段階で、ケースや支援者としての自分に関する何かしらの気づきを得られるのである。この結果に基づけば、世帯担当者自身の情緒的な振り返りが可能となる資料作成を意図することで、CFでの気づきを深める工夫が可能となる。ただしそれは、CFで他者との議論を通して生まれる気づきが、資料作成により網羅されるということではない。発表者は資

料作成を通した情報と情緒の整理により、CFで何を検討したいかと【CFの目的を意識】することにつながり、参加者と意見を交わす準備が整う。

もう一方の立場は、参加者である。参加者は、CF当日まで特段作業を伴う準備はない。唯一アンケートによって検討ケースを選択する作業があるが、それ自体が参加者に与えている影響は、本論では見られなかった。参加者の場合は、CFまでの事前準備よりも、当日その場で適切なタイミングを見計らってどのような発言をするか検討することがCFの場作りに影響していた。質問意図や、参加者に求められているテーマに見合った回答を自分ができているか、不安にも近い感情を抱きながら【検討目的に見合うか逡巡】する。また、発表者の求める筋道でディスカッションが進行するよう、【噛み合った議論への配慮】をする。こうして〈発言を精査〉する個人内のプロセスを経て、CFで参加者全員の多様な意見が交わされるようである。このように〈発言を精査〉する中で、参加者は【CFの目的を意識】し、意見を発する判断基準としている。すなわち、発表者だけでなく全参加者にとって【CFの目的を意識】することが活発で豊かな質のディスカッションを行う上では重要だと考えられた。

以上のように、発表者の目指す検討課題が決められた時間内に満足に検討できるよう、参加するそれぞれの立場で資料準備や場に見合った発言を通して、個々人の内面での葛藤や逡巡、情報整理が行われていた。CFに向けて情報や感情を整え、アウトプットする準備をする発表者の資料作成のプロセスを「支援の変遷を振り返る内的整理」とした。参加者は〈発言の精査〉によって、発表者にとって「安心感のあるCFの場の構築」を行っていた。しかしそれが発表者以外の参加者にとっても、ケースを効果

的に検討するにあたり何をディスカッションすべきか【CFの目的を認識】することにつながっていた。これも、支援を進める上で今この時点で何を検討すべきかについての気づきである。同時に、この気づきを皮切りに参加者全体の発言が促され、【他者の視点との出会い】となり更なる気づきを促進していた。

2. 気づきの促進以外のCFの効果

CFで【他者の視点との出会う】があったからと言って、必ずしもその場ですぐに気づきが促されるわけではない。特に考え得なかったアイディアや異なる視点からの意見の場合、むしろ時間を置く、もう一度他者の視点をアウトプットしてその意味を確認する等【他者の提案を反芻】するプロセスが必要である。この丁寧なプロセスが保障されることで、気づきが促されていく。

ところで、【他者の視点との出会い】は気づきを促すだけでなく、直接「支援の推進力」になり得ることがある。例えば、発表者自身が考えていた支援計画がより豊かになるような【支援計画の補強】となるアイディアを得る、発表者の【支援方針の共通認識】を参加者全体で得られる、具体的な【支援のタイミングの助言】を得られる場合である。これらは、CFを通して支援内容やそのタイミングについて、職員間のコンセンサスを得られるということであろう。実際に承認を得られる意味合いを持つだけでなく、発表者自身の〈精神面のバックアップ〉になることでも「支援の推進力」になっている。他者が自分と同じような考えを持っていると【同じ見解の発見による安心感】を得る、伝えた内容が参加者にも伝わったことがわかり【理解されている感覚】を持つ、他者から支援内容について承認を得て【支援・見立ての自信補強】となる等である。これらは気づきを促すよ

りも発表者が支援に取り組む自信や意欲を掻き立てることで「支援の推進力」につながっている。クローズドなメンバーで展開されるCFでの、参加者間の相互の心遣いが反映されているものとも考えられ、職場風土の一部が反映されるものとも言える。また、ケースに対する担当制の支援体制は、難しいケースも多い母子生活支援施設のような現場では、それだけケース担当者にとって日々無意識のうちにプレッシャーを背負うという現状を表しているとも考えられる。

CFのもう一つの重要な機能として直接「支援の推進力」を生み出していた。本結果からは、実質的な「支援の推進力」につながる要因として、支援内容やそのタイミングといった知識はもちろんのこと、間接的な要因である仲間同士のつながりやケースを抱え込まない体制といった職場風土も十分に影響している可能性が示唆された。

IV. 総合考察

本論では、A施設の多分野協働カンファレンスで参加者の気づきが促されるプロセスを明らかにしてきた。これを通して、多分野協働カンファレンスを最大限に効果的に運営するために必要な工夫を検討したい。

発表者の自己理解やケース理解は、時系列上いくつかの段階で促されていた。最初は発表準備となる資料作成の段階である。本結果では、資料フォーマットに沿ってケースの情報を整理する中で、情報を系統立てて考え、合わせて情報に付随する情緒の整理もなされていることが明らかになった。続くカンファレンスのディスカッションの段階では他者の意見を通した気づきが得られていた。ここまでの二つの段階を通して得られる気づきもあれば、カンファレンスでの他者の意見を取り入れ、反芻することで時間をかけて得られる気づきもあった。本論では

気づきの質については扱っていないが、カンファレンス開催のプロセスでこの3段階で気づきが深まるよう構造化していくことは、カンファレンスをより効果的な営みにし得るだろう。実際には、発表ケースが決定した段階で、発表ケースの主担当者と副担当者にファシリテーターを交えた打ち合わせが実施されており、支援の意図や思いが整理されている。個人内整理だけでなく、事前に最小単位のクローズドなメンバーでのディスカッションがなされていることは、データに反映されてはいないが、発表者の内的整理に影響していた可能性もある。いずれにしても、単純に多分野協働カンファレンスを実施するだけでなく、その事前準備を丁寧に行う工夫が、気づきを促す、あるいは深める機能を最大化させる要因として考えることが重要であろう。

また、本結果からは、カンファレンスが発表者にとって二つの効果がもたらされていたことが示唆された。一つは、多くの先行研究で挙げられている通り、気づきを促進する効果、もう一つはその後の支援に直結する支援の推進力を得られる効果である。カンファレンスの場で特に前者を促していたのは、スーパーヴァイザーからのコメントであった。実際に行われている支援や支援者の思いと、ケースの動きや母子の思いとの関連を認識する、すなわち【ケースと支援との相互作用の理解】がスーパーヴァイザーからのコメントで獲得されていたのである。そして、後者はクローズドな参加者内で支援内容やケース理解について承認し合う等して〈精神面のバックアップ〉が得られることで得られる効果であった。すなわち、これらの効果にはカンファレンスの構成員の要因が影響してくる。様々な思いを持って行われる支援と、ケースの課題との関係を言及されることは、発表者にとっては時に精神的安全性を脅かされる感覚を

もたらず。あるいは、両者を包含する役割をクローズドな仲間内で担うことは必ずしも容易ではない。このような時、支援とケースとの関連については、外部のスーパーヴァイザーの方が見えやすく、伝えやすい。気づきをより深め、発表者が安心して自由に内的探索に臨み新たな気づきや視点を得るには、内部性と外部性の両者を兼ね備えた場作りも重要であると考えられる。

多分野協働カンファレンスを効果的に実施するための知見はまだ少ない。本論においても、多分野での協働ならではの要素は必ずしも十分ではない。しかしながら、気づきを深めるための過程や資料、構成員といった構造化による要因、支援に直結する心理的要因等は、心理臨床的な専門性の担うところである。今回は職員への回顧的インタビュー形式での調査に留まるが、今後は実際のカンファレンス記録の分析等により、より客観的な調査からも検討していく。

▶文献

- 藤井博之 (2018). 地域包括ケアと多職種連携 日本福祉大学社会福祉論集, 138.
- 浜谷直人 (2005). 巡回相談はどのように障害児統合保育を支援するか——発達臨床コンサルテーションの支援モデル—— 発達心理学研究, 16 (3), 300-310.
- 服部洋美・片山はるみ (2021). 特定機能病院の精神科病床における身体拘束に関する毎日の多職種カンファレンスの継続による効果——身体拘束率の低下と参加者の気づき—— 日本看護科学会誌, 41, 866-875.
- 木下康仁 (2020). 定本M-GTA——実践の理論化をめざす質的研究方法論—— 医学書院.
- 古賀美由紀・青木紀久代 (2021). 母子生活支援施設におけるケースカンファレンスシートの開発——児童福祉分野の心理臨床④—— 日本子ども虐待防止学会第27回大会, ポスター発表
- 黒田 格・大浦 誠・三浦太郎・小林直子・渡辺史子・黒田 萌・北啓一朗 (2021). 多職種倫理カンファレンスの質改善を試みREFLECT rubricで評価する事で、チームの省察力を育成する 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 44 (2), 97-100.
- 松下博宣・市川香織・藤谷克己・石川弥生 (2020). 組織風土に関わる多職種連携の阻害・促進要因の検討——組織風土パーセプションの共起ネットワーク分析—— 保健医療福祉連携, 13 (1), 11-20.
- 鈴木 誠 (2015). 序章 ワーク・ディスカッションとは何か マーガレット・ラスティン, ジョナサン・ブラッドリー (編) 鈴木 誠, 鶴飼奈津子 (監訳) ワーク・ディスカッション——心理療法の届かぬ過酷な現場で生き残る方法とその実践—— 岩崎学術出版社 pp.2-14.
- 横田宜子・上村智彦・小田正枝 (2011). Jonsen 4 分割表を用いた臨床倫理カンファレンスが医師と看護師に与える影響 日本がん看護学会誌, 25 (1), 14-23.

謝辞

本論文の執筆に留まらず、ファシリテーターとしてのカンファレンス運営から丁寧なスーパーヴァイズ、ご助言を賜った白百合心理・社会福祉研究所所長の青木紀久代先生、本論文の調査にご理解を示し許可してくださったA施設長の島田恭子先生、支援の合間を縫って協力くださったA施設の職員の皆様には、心より感謝申し上げます。

Considerations on promoting insights for case support in interprofessional collaboration conferences

KOGA, Miyuki, ASADA, Moe

Shirayuri Park Heim , Toyo Gakuen University

Journal of Child Welfare and Psychology 2025, Vol.2, 19-29

Abstract:

This paper aims to clarify the process by which participants gain insights in case conferences in interprofessional settings, with the goal of providing suggestions for conducting effective interprofessional collaboration conferences. The results of a survey and interviews with participants in a conference at a maternal and child life support facility (A facility) were analyzed using M-GTA. The analysis revealed that insights can be promoted even during the document preparation phase, that sharing the purpose of the conference encourages discussion, that supervisors and closed members can bring different insights, and that feedback from others needs to go through a process of reflection and internalization. While communication strategies within the conference are naturally important, the study suggests that, in addition to those, careful preparation and reflection, as well as thoughtful organization of materials and participants, can further promote insights.

Key words: interprofessional work, case conference, maternal and child living support facility